

青年期における親への愛着と適応過程

— 環境移行期に着目して —

丹羽 智美

I. 問題と目的

愛着は「ある特定対象との相互作用により形成される比較的永続的な愛情の絆 (affectional bond)」と定義されている。主に乳幼児期において実証的研究がなされてきたが、青年期においても親は安全基地として十分機能していることが指摘されている (Kenny, 1987)。また, Allen & Land (1999) は, 青年期における親への愛着の役割とは, 青年のソーシャルスキルの向上をサポートすること, 青年の環境に対する対処の仕方を調整することをあげている。つまり, 心理的な安定感を与え, 社会に適応していく能力を促す機能があるといえる。

そのような愛着の機能をとらえるには, 機能する状況が重要となってくる。Bowlby (1973) は, 愛着は安全で安心した状態を常に保つように, 認知, 情動, 行動を制御する働きがあるため, 愛着の機能はストレス状況において明確にみられると述べている。そこで本研究では環境移行期に注目し, 大学入学というストレス状況における適応感を縦断的に調査する。青年期の親への愛着の向け方によって, 環境移行期における適応感にどのような違いがみられるのかについて検討することを目的とする。

ところで本研究では, Bartholomew (1990) の自己モデルと他者モデルの2軸によって愛着スタイルをとらえる枠組みを用いる。青年期における親への愛着を測る尺度は, 愛着を安定—不安定の一次元でしかとらえてこなかった。しかしそれは, 例えば Bartholomew (1990) の安定型, とらわれ型, 愛着軽視型, 拒絶不安型という愛着スタイルのうち, とらわれ型, 愛着軽視型, 拒絶不安型という異なった愛着スタイルがまとめられて分析されることになり, 愛着の効果を正確にとらえられていない可能性がある。Bartholomew (1990) の概念は, Brennan, Clark & Shaver (1998) によって特定対象に対する適用可能性が示唆されたため, この枠組みを親への愛着に適用して尺度を構成し, 親への愛着と適応感との関係を検討していく。

II. 研究1

【目的】

青年期における親への愛着をとらえる尺度を構成することを目的とする。Bartholomew (1990) の枠組み

は, 自己モデルが愛着対象への不安に, 他者モデルが愛着対象への親密性回避に対応し, それらの高低の組み合わせによって愛着スタイルがとらえられる (Brennan et al., 1998)。そこで親への愛着を愛着不安と愛着回避でとらえる新たな親への愛着尺度を作成し, その信頼性と妥当性の検討を行うことを目的とする。

【方法】

調査協力者 大学生・短期大学生・専門学校生の1年生1187名 (男性496名, 女性691名)。調査内容 ①親への愛着の測定項目: 「愛着不安」12項目, 「愛着回避」13項目の計25項目。②自己受容尺度 (宮沢, 1988)。③親子関係尺度 (落合・佐藤, 1996) より, 「子が親から信頼/承認されている親子関係」11項目, 「子が困った時には親が支援する親子関係」12項目。④自由記述: 幼稚園・保育園に通っていた頃, 親がどのように接してくれていたか, また, それをどのように感じていたかについて, できるだけたくさんの記述を求めた。

【結果と考察】

因子分析 (主因子法・バリマックス回転) の結果, 愛着不安と愛着回避の2因子17項目が抽出された。下位尺度間の相関係数は $r = .23$ であり, 低い相関がみられたが, 愛着不安と愛着回避は独立であると判断した。愛着不安では $\alpha = .87$, 愛着回避では $\alpha = .83$ が得られ, 高い内部一貫性が示された。また, 愛着不安では $r = .65$, 愛着回避では $r = .81$ という高い再検査信頼性も得られた。

愛着尺度の下位尺度と関連概念尺度の間の相関関係と自由記述により妥当性の検討を行った。その結果, 相関関係は Griffin & Bartholomew (1994) によって想定されている結果とほぼ一致するものであった。愛着不安と親子関係との間に想定されていない有意な相関関係もみられたが, 理論的に解釈可能な結果であると判断した。また, 自由記述の分析によっても, 親への愛着尺度の妥当性が確認された。

III. 研究2

【目的】

愛着スタイルによって, ストレス状況における情動制御や対処行動に違いが見られることが実証的に検討されてきている。しかし, 縦断的な適応過程についての検討

はなされていない。そこで、ストレス状況として大学入学という環境移行に焦点をあて、親への愛着の向け方による適応過程の違いについて縦断的に検討する。

【方法】

調査協力者 大学生・短期大学1年生628名（男性306名、女性322名）。なお、研究1の調査協力者の一部である。
調査時期 2001年4月中旬から下旬と6月下旬から7月上旬に行った。
調査内容 ①親への愛着尺度：愛着不安8項目と愛着回避9項目の計17項目。②自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982 訳）。③UCLA 孤独感尺度（工藤・西川，1983 訳）。④大学生生活不安尺度：古城（1994）による新入生の大学生生活不安についての自由記述を参考に作成。対人関係不安・勉強不安・進路不安からなる21項目。4月の調査では①②③④を、6、7月では②③④を分析に用いた。

【結果と考察】

対人関係不安と孤独感では、親への愛着不安が高い人の方がストレス期である4月に感じる孤独感や対人関係不安と、ストレス低減期である6、7月に感じる孤独感や対人関係不安の差が大きかったことが示された。つまり、親への愛着不安の高い人の方がストレス期に孤独感や対人関係不安を緩衝できないため、ストレス状況からストレス低減状況への過程として、孤独感や対人関係不安の変動が大きいと考えられる。またストレス低減状況でも、愛着不安の高い人の方が孤独感や対人関係不安が高いことから、ストレス低減状況というベースラインにおいても差異がみられることが明らかとなった。男女別に分析を行うと、これらの特徴は男性においてみられた。つまり男性は、親への愛着不安によって孤独感や対人関係不安の適応過程が変わることが示唆された。

また、対人関係不安において愛着スタイル間に差がみられた。男女別に分析を行うと、これらの特徴は女性にみられた。つまり、女性は親への愛着スタイルによって対人関係不安が異なることが示唆された。

IV. 研究3

【目的】

環境移行期で無視できないのが、対人ネットワークの再構成である。新しい環境での友人は最も身近なサポート源となるため、友人との親密な関係を形成しておくことが、環境移行後の新しい環境で適応的な生活を送る上で重要であると考えられる。そこで研究3では、親への愛着による友人関係の違いについて検討する。

【方法】

調査協力者 大学生・短期大学生628名（男性306名、女性322名）。なお、研究2の調査協力者と同一である。
調査時期 2001年4月中旬から下旬と6月下旬から7月上

旬に行った。**調査内容** ①親への愛着尺度（4月調査）。②友人関係（岡田，1995）より、特定の友人に対して評定できるように、一部改変して用いた。気遣い、ふれあい回避、親密性の各4項目計12項目からなる（6、7月調査）。

【結果と考察】

親への愛着不安の高い人の方が、友人に対してふれあい回避をし、親密性も低いという結果が見られた。愛着不安の高い人は自己への価値感が低い傾向がある（Griffin & Bartholomew, 1994）。そのため、親密な関係を相手に求めることは相手に迷惑ではないかという思いを抱く傾向があるので、ふれあい回避をすると考えられる。だから、親密性も低いのだろう。また、愛着スタイル間で友人に対する気遣いに差異がみられた。以上より、親への愛着の向け方によって友人関係に違いがあることが示された。また友人関係での親密性について、女性においてのみ親への愛着不安が高い人の方が親密性が低いという結果が示された。

V. 総合的考察

本研究により、親への愛着の向け方による適応過程の違いが明らかとなった。ストレス状況からストレス低減状況への適応過程として、愛着不安の高い人の方が孤独感や対人関係不安の変動が大きかった。またストレス低減状況でも、愛着不安の高い人の方が孤独感や対人関係不安が高かった。また、愛着スタイルによって対人関係不安が異なることが明らかとなった。しかし、ストレス期とストレス低減期を設定できなかった適応指標もあったことから、対人関係以外の心理的適応感の指標がどのような適応過程をたどるのかについて今後検討する必要があるだろう。

次に親への愛着の向け方による適応過程の違いは男性で、親への愛着スタイルによる適応感の差異は女性で見られた。愛着理論では性差について触れられていないが、本研究の結果は性の違いによって親への愛着の機能の仕方に差異がある可能性を示している。そのため、さらなる性差の検討が望まれる。

そして、親への愛着が友人への接し方に影響していることが明らかにされた。Mikulincer & Nachshon (1991) や Fischer, Munsch & Greene (1996) のように、親への愛着が対人関係傾向を規定し、友人への接し方に影響を与えていると解釈できるが、親への愛着がストレス状況で新しい友人との助け合いに影響を与えた結果、友人関係が左右される可能性も考えられるだろう。

今後は、ストレス状況の設定方法やストレス時における心理状態の測り方について考慮しながら、親への愛着の機能を明確にしていく必要があると思われる。